

岩手県御所湖におけるカンムリカイツブリの初繁殖

藤井忠志¹・渡邊治²

The First Breeding Record of Great Crested Grebe *Podiceps cristatus*
in Lake Gosho, Iwate Prefecture, Japan.

Tadashi FUJII¹ and Osamu WATANABE²

1 岩手県立博物館 020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34. Iwate Prefectural Museum, Morioka.

2 雫石野鳥研究会 020-0503 岩手県岩手郡雫石町七ツ森16-155. Shizukuishi Wild birds Institute.

Abstract

We observed the ecology of a pair of the Great Crested Grebe *Podiceps cristatus* during breeding season in Lake Gosho, Iwate Prefecture, Japan. Observation period was short-term from April 29 to May 7, 2013, but this breeding record is the first record in Iwate Prefecture. They have five eggs in the nest, they changed incubation and repair of the nest each other. In 87.7 minutes average incubation time, we couldn't distinguish female and male from their appearance. Their natural enemies are Black Kite *Milvus migrans* and Carrion Crow *Corvus corone*, dog *Canis lupus familiaris* and human being *Homo sapiens*.

はじめに

日本には5種類のカイツブリ科鳥類が生息するが、カンムリカイツブリ *Podiceps cristatus* は全長56cmで、日本最大のカイツブリである(高野 1981)。ユーラシア大陸の中緯度地方に広く分布、繁殖している。冬期はヨーロッパ南部、アフリカ、アジア南部などに渡って越冬する。本亜種は、日本では本州の関東以西に冬鳥として渡来し、繁殖地は1972年に青森県六ヶ所村市柳沼での繁殖記録が初めてあったが、その後、滋賀県、大阪府、三重県(日本野鳥の会野鳥記録検討会 1994, 1998 疋田 1990)、そして秋田県(西出ほか 2005)などでも繁殖記録の報告例がある。

今回は、繁殖活動が抱卵初期で失敗したものの、岩手県において初の繁殖活動が短期間ながら観察できたので、ここにその一部を報告する。

調査地および調査方法

調査を行った御所湖は、岩手県盛岡市の最北に位置し、国土交通省東北地方整備局が管理する特定多目的ダム湖で、電力供給のほか農業用水として周辺市町村の水ガメにもなっている。冬期はオオハクチョウ

*Cygnus cygnus*をはじめとするガンカモ類が多数渡来し、2005年には近絶滅種のソデグロヅル *Grus leucogeranus* 幼鳥も渡来した人造湖である。

湿地一帯の植生は、ヨシ *Phragmites australis*、マコモ *Zizania latifolia*、アイバソウ *Scirpus wichurii*、ミソハギ *Lythrum anceps*、クサレダマ *Lysimachia vulgaris* が優占し、その他イヌコリヤナギ *Salix integra*、オノエヤナギ *Salix sachalinensis*、シロヤナギ *Salix jessoensis*、オニグルミ *Jugans mandshurica*、ケヤマハンノキ *Alnus hirsuta*、ノイバラ *Rosa multiflora*、イタチハギ *Amorpha fruticosa*、マツカサススキ *Scirpus mitsukurianus*、イ *Juncus effusus*、ガマ *Typha latifolia*、ミゾソバ *Persicaria thunbergii*、アシボソ *Microstegium vimineum*、アズマネザサ *Pleioblastus chino*、チゴザサ *Isachne globosa* などが認められた。

巣は湖岸から最短で50mほど離れた位置に浮巢状態であることから、観察者の姿が露出しない車の中からプロミナーや双眼鏡、デジタルカメラ一眼レフ、デジタルビデオカメラ(キャノン XL1-S)を用いて観察・撮影記録を行った。

本種は雄個体が外見上身体も大きく、色彩も明確であるのだが、本つがいにおいては身体の大きさや羽毛



図1 転卵・巣材の補修をする（卵数5個 2013.05.05）

の色彩も似通っており、外見上からの性別は判別できなかった。そのため、5月5日～6日の連続2日間だけ、夜明けから日没までの2日間を通して、観察者2名で交代しながらつがいの抱卵時間や個体ごとの巣の補修回数・巣材の種類、天敵からの防衛行動等を記録した。なお観察は、2013年4月29日～5月7日まで実施したが、前述した2日間以外は断続的であり、個体ごとの違いを述べるできないため、主に2日間の観察記録をもとに報告する。

経過と結果

観察者のひとり渡邊が、4月19日16:26に御所湖塩ヶ森の湖岸近くを、カンムリカイツブリ1羽が何度も潜水しながら泳いでいたのを目撃し、写真撮影した。巣材を嘴にくわえ、湖面上の藪の中に姿を消したのを確認した。

4月29日13:03に営巣を初めて発見し、14:40には卵1個を抱卵中の個体を確認した。翌、30日には、藤井も同行し、羽毛の特徴や身体の大きさから、カンムリカイツブリであることを確認した。その際、抱卵中の卵は2個であった。その後、断続的ながら観察を継続し、5月2日には3個であることを、5月5日には転

卵する際の画像から5卵であることを確認した(図1)。

また、抱卵はつがいが交代で行っていたが、便宜上、個体識別のため、最初に抱卵していた個体をA、後に抱卵した個体をBとした。5月5日～6日の2日間の日中におけるつがい全体の平均抱卵時間(単位:分)は 87.7 ± 29.0 ($n=16$)で、最長抱卵時間(Max.)はB=128で最短抱卵時間(Min.)はA=39であった。なおそれぞれの平均値±標準偏差はAが 75.4 ± 28.4 ($n=9$)、Bは 103.4 ± 21.1 ($n=7$)となり、有意差はなかった(Mann-Whitney U-test, 両側検定 $Z=-1.801, P>0.05$)が、夜間も含めると明らかにBのほうが長い。

抱卵しない側の個体は、頻繁に巣材を嘴にくわえて、補修作業を行っていた(表1)。その際、湖中・湖底内に沈むヨシの古い茎を集めていた(図2)が、ときには種不明の若葉を抱卵中の個体に渡す場面もあり(表1のかっこ)、抱卵中の個体はこれを産座の周辺に敷いていた。

なお、2日間におけるA、B間の補修回数は、B個体が有意に多かった(χ^2 検定, $\chi^2=8.723, df=1, 0.001 < p < 0.01$)が、若葉を運ぶ回数は、有意差がなかった。2日間の連続観察で、夕暮れまで観察したが、夜間、巣に残った個体はBであった。また、抱卵中でも巣を離れる



図2 補修作業のため巣材を集める (2013.05.05)

ときには、巣材で卵を覆う行動も見られた。

抱卵中、特にトビ *Milvus migrans*、ハシボソガラス *Corvus corone*、人間 *Homo sapiens*、イヌ *Canis lupus familiaris* に対しては、警戒心が強かった。トビが上空を旋回すると、首を伸ばし、頭部の両方の飾り羽をたてながら、翼を半開きにする行動が何度もあった(図3)。抱卵交代を待ちきれずに巣を離れた個体が再度、巣に戻ってきたとき、上空からのハシボソガラスの接近に対し、グウェツという声を発しながら抵抗しようとする場面もあった。また、本種の抱卵を知らない釣り人がボートで巣の70m付近まで接近したり、岸辺を散歩中の人とイヌに対しては、抱卵をやめて巣の外へ逃げる行動がみられた。なお、上空を飛翔するミサゴ *Pandion haliaetus* や他のカモ類に対しては、全く警戒しなかった。5月5日・6日の両日とも、他の1組のカムリカイツブリが抱卵中の巣の周辺に出現したが、特になわばり争いのような行動はなかった。しかし、抱卵していない個体は常に巣の近くにおり、他のつがい個体が巣に接近しないように巣を防衛するような行動をとっていた。なお、他のつがいは、お互いに飾り羽をたて、頸を伸ばしながら向かいあう行動を何度も行っていた。5月7日未明に、雨によるダム湖内の増水と強風により、巣がまるごと吹き飛ばされ、跡形もなくなっているのを早朝、確認した。

繁殖活動失敗後、渡邊が毎朝、御所湖周辺を回っていたが、カムリカイツブリそのものの姿すら確認できなかった。

考察

造巣時の観察はできなかったが、抱卵中のカムリカイツブリの雌雄は、抱卵はもとより、補修作業等、すべてを共同で行っていた。

卵は白色無斑で(高野 1981)、産卵数は通常3-5個であり(del Hoyo et al.1994)、今回の観察においても同様だった。本つがいの場合、4月29日の卵が初卵とすると、産卵は1日1個行われ、5月3日の段階で5個がそろったものと思われる。

安藤(2006)によると、雌雄の抱卵時間は1時間ほどとしているが、今回の観察では1時間以上抱卵され、長いほうの個体の場合には100分前後に及んでいる。本種の場合、夜間、在巢するのが雌雄のどちらか明確ではないが、抱卵・補修作業等、夜間在巢したB個体が熱心であるといえる。

抱卵していない個体によるヨシの古い茎やその他の巣材を頻繁に運ぶ行動は、安藤(2006)と同様であった。これは雨天時におけるダム湖の水位上昇による、卵が水没することを免れるためと考えられるが、種不明の若葉が何度か運ばれ産座の周辺に敷かれていたの



図3 トビを警戒する抱卵中の親 (2013.05.02)

表1 つがいごとの補修回数

個体 Individual	5月5日 May 5	5月6日 May 6	総計 total
A	132 (7)	64 (11)	196 (18)
B	99 (6)	160 (11)	259 (17)

ただし括弧内は、若葉を運んだ回数
雌雄間における補修回数の有意差 Significant 0.001<p<0.01

は、どのような効果があるのか不明である。

巣を離れる際に巣材で覆う行動は、天敵からの防御および卵が冷えないようにするためのものであろう。上空のミサゴに対しては無警戒だったが、トビやハシボソガラスに対しては、異常な警戒ぶりであり、これらは本種に対して日常的に負の影響を及ぼす天敵と考えて良い。しかし最大の脅威は、イヌや人間であることも今回の観察で明らかになった。本種の繁殖活動の

完全な成功例は確率として少ない(宮 私信)らしいが、これは巣が浮巢状態で水位や風などの気象条件に左右されること、繁殖活動の拠点である巣が周囲に丸見えで、天敵からの攻撃を受けやすい環境にあることなどに起因するものと思われる。筆者が盛岡気象台から入手した気象情報では、巣が崩壊した5月7日未明は平均風速が5.8m/sの豪雨で、しかも1:50には瞬間最大風速12.1m/s(北東の風)が観測され、巣がまる

ごと吹き飛ばされたと考えられる（台風の定義：瞬間最大風速が17.2m/s以上の温帯低気圧）。

本つがいおよび求愛行動を行っていた他のつがいその後、同地において繁殖活動を再開・開始するかは、今後の推移を見守りたい。

引用文献

- 安藤一次.2006.青森県小川原湖におけるカンムリカイツブリの繁殖過程と育雛行動の観察.Strix Vol.24,pp.135-144.
- del Hoyo J, Elliot A & Sargatal J(eds)1994. Handbook of the Birds of the World.Vol.1 Ostrich to Ducks. Lynx Edicions, Barcelona.
- 疋田章二.1990.大阪の鳥むくどり通信(90):7.
- 日本野鳥の会野鳥記録検討会.1994.野鳥情報観察記録 1993・7-1994・7.Strix.13:267
- 日本野鳥の会野鳥記録検討会.1998.野鳥情報観察記録 1996・8-1997・2.Strix.16:177-183.
- 西出隆・舟橋功・武田栄悦・佐藤公生.2005.秋田県におけるカンムリカイツブリの繁殖初記録.Strix23:167-171.
- 高野伸二.1981.日本産鳥類図鑑.東海大学出版会,東京.

要 旨

岩手県御所湖において、カンムリカイツブリ1つがいの繁殖活動を観察した。観察期間は2013年4月29日から5月7日までの短期間であったが、この記録は岩手県初の繁殖記録である。卵は全部で5個産卵し、抱卵及び巣の補修活動は雌雄交代で行われた。平均抱卵時間は87.7分で、雌雄の判別は外見では判明しなかった。天敵としては、トビやハシボソガラス、イヌ及び人間が考えられた。

キーワード：カンムリカイツブリ，御所湖，繁殖活動，抱卵，巣